

発明くん便り: 抜粋版

目次

I. 「中国知的財産権事情」の見聞録

1. 一見は百聞に如かず
2. なんでもありの中国
3. いまだ、よう～分からん中国
4. これが知的財産大国、中国だ
5. 万里の長城で会った、怪しいお婆さん
6. 兵馬備博物館
7. 四川省（パンダの故郷）から「14年振り」のお客さん

II. 高杉晋作ならどうする、知財革命？

1. いい加減な親父が下関に縁を残した
2. おもしろくない世であれば、面白くすれば良い
3. 一つの決断が時代を変えるとき
4. 吉田松蔭と特許明細書、あるいは迷彩書？

III. 多くのアクセス数を頂いた「発明くんたより」: 抜粋版

1. いろんな人達の支えがあったからこそ、やってこれた
2. 味わいのある日本語と論理的な日本語の使い分け
3. 日本アイアールがテレビで紹介されました
4. 今月のメルマガは、作家浅田次郎の文章で締めくくり
5. 曖昧が諸悪の根源である

6. 特許請求項の「単項制」と「多項制」の違いがわかりますか
7. 困った！「放射能汚染土」の処分
8. 探偵小説はロジカル
9. 日本語の難しさを改めて知りました。

◆.余計なことですが、これだけは言っておきたい

1. 特許網の意味を理解しているのかな～？
2. 知的財産部の不要論が出て仕方がない？
3. やってしまったことは仕方がない、これからが大事
4. 分かる人は分かる、分からない人は分からない、
5. 耳の痛い話 (2)
6. 新型万能細胞（i P S細胞）の特許出願
7. 半導体、液晶関連の日本特許は、本当に役に立ったのか

◆.PATOLISの民事再生

1. 日本初の特許情報検索システム「PATOLIS」
2. JAPATIC は、特許業界の王者、
3. PATOLIS から見える特許業界の歴史

◆ おまけ:復興大臣辞任をめぐり「白河以北一山百聞思想」とは

1. (935) 「白河以北二東三文：中央と地方の関係
2. 孫子の兵法から学ぶ「知財戦略」

I .「中国知的財産権事情」の見聞録

1. 一見は百聞に如かず

中国と、どう向き合えばよいのか？とにかく、答えを多く用意することである。だからこそ、あらゆる面から眺め深く洞察する必要がある。古い話で恐縮だが、成都に旅した時のエピソードを紹介してみよう。こんな、ちょっとした出来事でも中国を知るヒントになるかも。

私は三国志の大ファンである。三国志に纏わる観光名所地はそれぞれ有料だ。入場料が外国人と中国人では違う。中国人は30円程度で入れるとすれば外国人は500円位はする。切符も違う。中国人向けの切符は馬券みたいなもので、外国人向けの切符は写真入りで豪華である。

私、500円も払うのもシヤクである。そこで私、中国人向けの切符で入る事にした。切符をチェックする女性がなんと3人もいる。そのうちの一人が「お前は外国人だろう」というわけ。私は慌てておもわず、「いや違う、私は中国人である。日本人ではない」と日本語で答えてしまった。そうすると、あとの二人が「そうだ、あれは広東語だ」と答えてくれた。そのあとでおまけまでついた。

「あの顔は広東人そのものである。頭の毛は「チジレ毛」で、目がへこんでいる。私の親戚にも金持ちの広東人がいるけど、それと良く似ている。しかしこの人は金持ちなんかではない」と言う事で私は中国人価格で入場はしたものの、とても複雑な気持ちになった。ということは、成都まで来ると外国人といえば髪がブロンド色で目が青い、これが彼らの外国人であるらしい。私のように目がへこんで「チジレ毛」は広東人なんですネ。サスガに中国はひろい。(矢間伸次 2005/09/05)

2.なんでもありの中国

地元の人は、外国人と中国人の区別はどこですか。泊まってるホテルで区別するようである。とあるホテルから出てきた奴は全て外国人だ、ということになる。外国人は金持ちだから少々高く売りつけても構わないと、いうことらしい。

ホテルから歩いて15分くらいの距離に諸葛孔明の廓がある。更に、10分くらい先にもう一つ見どころの名勝地がある。ホテルから歩いて15分の距離ですよ。それでもタクシーに乗った。歩くのは危ないというホテルマンの薦めである。タクシーに乗ったら、なんと30分も掛かった。ワンメータで行くところが30分も掛かる。

一体、どんな走り方をしているのか、よくわからん。どうもグルグルと廻っているか、ジグザグに走っているんだなあ……。外国人だとこんな風になる。そこから次の所に行くとき、また30分掛かる。歩いて僅か10分しか、かからないところですよ。これもどういう走り方しているのかよく判らん。頭にきたので、帰りは50元払うからホテルまで連れて行けと、いったら、帰りは僅か10分でついた。なにもかもが信じられなくなった。(矢間伸次 2005/09/06)

3.いまだに、よう～分からん中国

9月16-24日迄、中国に行ってきた。コテコテ日本人おじさんの味方？、安心の翼？ JALのチケットで、行こうかな～、ということで御代を聞いてビックリ、なんと16-17万。ここは思い切ってリストラだ、中華航空(CA)の往復7万円に決定。あとでパック旅行のパンフを見たら5つ星ホテル3泊で、なんと15-16万、しかもJALである。しくみがよくわからん。

もっとわからんことを中国で体験。400元もするみやげを200元にするから買え。「う～ん日本円にすると約3000円か・・・チョイト高いな・・・」では、2000円にするからどうだ。「日本円でいいのか」日本円は駄目、ドルか元だ、どうせお前は、ドルを持っていないだろうから元だ。2000円にまけてやるが、

円はだめ、元なら没問題。だから 200 元払えということらしい。どうも辻褃が合わない。

決めかねていたら、もうひとつ同じものをつけるから 200 元でどうだ、ということで商談が成立。頭は錯乱状態。どう考えても得したのか損をしたのか、よう～分からん。わかったことは、ドルは強く円が弱いこと、そして元が強くなりつつあることである。（矢間伸次 2005/09/29）

4.これが知的財産大国、中国だ

車の渋滞のおかげかな？「知的財産権啓蒙運動」らしきポスターをやたらと見かけた。旗（中国人は旗が好きらしい）も、あっちこちに立てられていた。上海の駐在員、上海へ来る外国人へのアピールらしい。「中国はこんなに知的財産権の保護に力をいれているヨ」と。

それにしても車の渋滞と警笛のうるさいこと、これには参った。いま上海ではマイカーの新規登録を入札制にして制限している。入札価格は 50-60 万円ぐらいで、150 万円に高騰したこともあったらしい。中にはずるい奴がいて、隣の蘇州市で登録して上海に乗り入れていたらしいが、乗り入れの時間を制限するなど、当局とあの手この手の知恵比べ？

もう一つ、ピカピカの高級車が、どんどん増えているのには目を見張る。ホンダの C-RV が人気らしい。「オッ、あそこに走っているのもホンダ C-RV だ、中国は金持ちが多くてすごいな～」と感心していたら、張さん曰く「社長、あれは偽者です、よ～く見てください、S-RV と書いてあるでしょう」「エッ、本当だ」これだけソックリでは日本人が区別できるはずが無い。

タイヤのスペアケースには、しっかりと HONDA と書かれている。ヘッドとバックに付けられている (H) のマークも燦然と輝いている。ドライバーはこの

ような偽者パーツを買ってきて勝手にくっつける訳だから取り締めることは難しいかも。

本物の値段は 350-400 万円ぐらいかな？偽者は 100 万円程度らしい。偽者の寿命は 2 年ぐらいでボロボロだ。しかしドライバー達は、買い換える事で、いつもリッチな気分が味わえる。ということで没問題。S-RV のメーカーは、この偽者が主力商品で経営を支えているから、これも没問題。中国にはこんなニーズがあるから悩ましいのである。

とあるレストランでトイレを借りた。「こんな地方のレストラン迄、TOTO（東陶）が入り込んでいるとは、東陶の営業も凄いものだ」と、感心していたら、またまた張さん、「社長、この便器は偽者です。よ〜く見てください、TOTO でなく OTOT です」たまたま、プ〜っと噴出して、オシッコの行き先が狂ってあらぬ方向へ・・・オットット・・・イヤ〜これはマズイ！「OTOT」の謎がいま解けた（矢間伸次 2009/09/30）

5.万里の長城で会った、怪しいお婆さん

北京から北へ車で 3 時間の所にある長城、司馬台を登る。まだ観光地化されていないが西洋人の観光客が圧倒的に多い。暫くして気付いたのだが、我々の後を登山口から、ず〜と くっついてくる怪しげな？お婆さんがいるではないか、「お婆さん、あなたは一体、何者？」「司馬台の観光案内人だ、これが政府の許可書だ」控え〜いとは言わなかったけれど・・・「こちらから頼まなくても案内するの？」「そうだ、外国人観光客に必ず、くつつくようになっているのだ、没問題」それでは仕方あるまい、勝手にすればよい。

山は険しい、汗拭きの為、一服することにした。なんと、すばらしい景色であらうか、感動、また感動。お婆さん、俄かにおおきな扇子を取り出して、一生懸命に仰いでくれるではないか。なぜか、また感動。そして、「あそこに見

えるのが自分の村だ」と指を指す。この3年間、冷害でトウモロコシの収穫がなかった。そこで政府が、自分たちに観光案内の仕事をつくってくれた、と言うわけである。中国共産党も、しっかりとガス抜きをしているわけだ。東シナ海のガスもキチンと抜き取るが。

一服して更に上を目指す。おばさん、足元の悪い所で、手を差し伸べて万全のホロー。もうこうなればギョチさはない。おばさんのペースに嵌ったな。これから先は危険で、「此処まで」というところまで辿り着いた。これから先は、政府も保証しない。挑戦するのは勝手だ。挑戦した大学生もいたが、どうも遭難したらしい。政府とすれば、そんなことは知らない。責任も無い。これも没問題。

勝手に付いてきて、勝手に仰いでくれて、勝手に手を差し伸べてくれて、最後は、みやげを買わせるビジネスモデルは特許になるかも。日本に帰ったら、おばさんのセールス魂を見習って、我が社の商品を売りまくるか。それにしても、おばさん3時間もかけて歩いて、しかも1日、2-3回は長城に登るらしい。少しは痩せてもいいはずだがコロコロと太っているのは何故だ。やけに明るい表情がホッとさせてくれた。200元のみやげ代はこの笑顔に払ったのだ。(矢間伸次 2005/09/30)

6.兵馬傭博物館

兵馬傭は見に行く価値が充分にある。1974年3月29日、西安西楊村の村民は村の南に井戸を掘ったが、掘っても水は出なかった。出てきたのは、陶傭の破片と古代青銅兵器であった。

最初に発見した農民は、現在「兵馬傭博物館」の館長を勤めていると聞いた。「死して更に生きる秦の軍陣」という豪華本を買うと、館長みずから直筆サインをしてくれる。「館長さん、85歳の高齢だから、いまのうちにサイン入り

本を買おうと、そのうち値があがるヨ」というガイドさんの勧めで、突然、欲の皮が突っ張った。2冊、買うことにした。

豊富な写真と日本語解説付きである。日本語と中国漢字がゴチャ混ぜになっている説明文は面白い。ところどころ、おかしい日本語があるが、翻訳者の苦勞が滲み出て実に興味深い文章になっている。中国 4000 年の重みを感じつつ、一気読みした。日本と中国との関わりは古くて深い。日本の文化は中国の影響を大きく受けているからであろう。自分の興味が、たくさん詰まっている。それにしても「日本語は難しいと思うヨ！上手に翻訳されている」と感心しきり。

兵馬傭の博物館で騎兵傭のモニュメントを買い求めた。JAL（日本航空）を諦めCA（中国国債航空）に変更して得た軍資金がある。しかし、いまだに送ってこないけど、「ちょっと心配になってきた、あるヨ」。多分、船便になったのかな～。「大丈夫、心配ない、すぐ着くヨ、」と、言ってくれたものの、本当に没問題かなあ～。（矢間伸次 2005/10/06）

7.四川省(パンダの故郷)から「14年振り」のお客さん

1996年、四川省の成都市を訪問した。目的は三国志の名跡めぐりと四川省科学技術情報研究所、四川省特許管理局への訪問である。弊社は1995年から本格的に中国特許関連の業務を開始した。弊社が初めて中国人社員を雇用したのが1990年である。名前は秦辛華さん。彼女と三国志ファンの我娘と3人の旅であった。弊社は彼女の入社を足がかりとして「中国特許関連」の業務を模索していた。

1995年、ダイヤモンド社主催の「中国特許視察ツアー」に参加した。初めての中国訪問であった。団長は黒瀬弁理士で、小生はオマケの副団長をやらせて頂いた。この「中国特許視察ツアー」の面倒を見てくれたのが「北京アイアール創業者」の張峻峰さんであった。北京、上海、深セン、と移動の中で彼

を口説いたのである。「日本で、日本語と特許の勉強をして中国で初めての特許情報サービス会社を創立しないか」が口説き文句である。なぜ、張峻峰氏なのか（?）、彼がとても好青年であったことが最大の理由であるが、このツアーで、「日本人が中国人を相手にして仕事することは困難である」という直感が働いたからだ。早い話が私の器量では中国相手の商売は出来ない、とギブアップしたのである。（因みに中国弁理士、王礼華先生とお会いしたのは中国国際貿易促進委員会（CCPIT）への訪問であった）。

さて、タイトルの本題へ入る。四川省からの御客さんだが、李遠紅女史（高級エンジニア）が計画したようだ。彼女は日本への留学経験者である。彼女は、帰国前の1995年、数ヶ月間であったが弊社へ研修生として特許の勉強をすることになった。このようなご縁で翌年の1996年、我々は成都へ訪問することになった。

昨年、李さんからメールが届いた。用件は、日本特許庁、科学技術振興機構（JST）等の関係機関への訪問依頼である。それを矢間さんの方で段取りをしてくれませんか、と言うお達しである。李さんのお父さんは、中国共産党の「御偉方」らしい。つまり李さんは、お姫様であるから何でも「まる投げ」である。今回も「まる投げ」である。しかし自分を忘れずに頼ってくれたのは嬉しい。いろんな書類を作成して手続きは大変であったが良い経験をした。まず、招聘理由が大事である。尤もらしくこんな内容で纏めた。

（1）招聘理由

今回招聘の主な目的は、四川省科学技術情報研究所の特許検索サービス、技術文献検索サービスの向上を求めため、日本特許庁、科学技術振興機構、日本知的財産協会、商用データサービス会社（NRIサイバーパテント）等の機関、団体、会社を訪問して意見交換をして頂く計画です。四川省科学技術情報

研究所は中国南西地区、最大の国内外特許文献収集部門と知的財産管理部門を管轄しています。

日本企業は沿海地区から中国南西地区への進出をしています。しかし中国南西地区における知的財産権に関する情報不足と準備不足が知的財産権のトラブルを多く発生させています。中国南西地区の（成都市、重慶市等）中国企業が日本企業に対して特許侵害を訴えるケースも増えています。日本アイアール社は四川省科学技術情報研究所と連携を深めることで中国南西地区へ進出する日本企業の知的財産戦略を支援できる知識の吸収に勤めています。その為には情報の交流活動を通して相互の理解を深め、双方の交流協力を更に促がす必要があります。

四川省科学技術情報研究所、陳副所長、（高級エンジニア）他、4名の来日であった。中国特許弁理士さんもいた。通訳は、超豪華に弊社の朴さんと秦辛華さんへお願いした。李遠紅さんと秦辛華さんは16年振りの対面で会ったが、その空白は感じ無かった。御互いが、ご縁を大切にしたい、という思いがあったようだ。自分は「中国大好き人間」で、いろんな中国文化に嵌っている。いま協力をして頂いている中国人の方にも大変恵まれている。本当にありがたいことだ。感謝をしている。

特許庁、科学技術振興機構（JST）、日本知的財産協会、NRIサイバーパテント様には大変お世話になりました。お陰様で一行は、「大変、実りのある来日でした」と大満足をして成都へ戻りました。忙しい中を対応頂いた訪問先のスタッフの皆様、本当にありがとうございました。改めて御礼を申し上げます。（2010/04/14）

Ⅱ.高杉晋作ならどうする、知財革命？

1.いい加減な親父が下関に縁を残した

私が物心のつく頃には親父は家族を残していなくなった。つまり蒸発である。先の戦争が終らんとする頃、親父は馬賊の親分になりたくて中国大陸への脱出を計画、当時、関釜連絡船の出航地であった下関にやってきたらしい。ところが、一週間も過ぎないうちに終戦をむかえてしまった。

馬賊の夢が破れた親父は「これも何かの縁だろう」と下関永住を勝手に決めたいらしい。そのお陰で、下関が私の故郷となった。住家は日和山公園内にあった。日和山公園からは、下関の町がほとんど見渡せる。右側には、下関漁港が見える。漁港を出ると日本海である。左側には関門大橋が目の前にみえる。正面は関釜連絡船の下関港、三菱造船所、宮本武蔵の巖流島が見え、その先には北九州市や門司港を望む事ができる。日和山公園内から眺める関門海峡の夜景は、特に美しい。

日和山公園には維新の立役者、高杉晋作の陶像がある。高杉晋作が何者であるか、司馬遼太郎の「花神」を読むまで知らなかった。天然ボケのおふくろ（だから親父が逃げたのかな・・・）に聞いたらチャンバラに出てくる「鞍馬天狗」と同じだと聞かされた。

高杉晋作の陶像に上って、晋作の足の甲に腰掛け、近所のガキ共にチャンバラの指示をして悦に入っていた。これが私と高杉晋作との出会いである。（矢間伸次 2005/8/30）

2.おもしろくない世であれば、面白くすれば良い

1864年12月16日、長州藩領の長府功山寺（下関市内）で高杉晋作を首領とする僅か80人の集団がクーデターを起こし馬関（下関）の藩政府所を襲撃した。明けて1865年1月14日、高杉晋作は奇兵隊を率いて再び挙兵した。つまり、藩政府の首脳陣を批判する檄文を飛ばしての本格的なクーデタであった。

このとき高杉晋作は「自分の死後は、墓前にて芸者を集めて、三弦を鳴らしてお祭りください」と言う遺書を書いたそうだ。これについて、力士隊長の伊藤俊介（博文）は「高杉さんは戦の天才であると同時に酒脱さと明るさを忘れなかった」そして「参ったとか、もう駄目だ」などと言う弱音は今まで一度も聞いたことが無かったそうだ。明日は、高杉晋作の命日、1月14日である。

小生は、知的財産立国日本なんて、「ちやんちやら」おかしいぞ！と檄文を飛ばして「面白おかしく」やってはいるが、ただ面白がるだけでなく、次世代へ伝えたいことがある。偉そうに言える立場ではないが・・・。

何事も「本気の心」で取り組む大切さを伝えたい。正しいと思った事は信念を持って行動すべきである。日ごろの行動が卑しければ、必ず組織に綻びが出る。すると会社は、事故を起こす。日ごろから正しい行いをしていない組織は対策もまちがえる。お客の信頼を失い、そして会社が滅びる。多くの社員、家族が不幸になる。

高杉晋作は28歳で生涯を閉じた。小生は晋作の2倍以上の生命を与えて貰っているが、いまだに何も出来ずに能書きだけか、大いに恥じ入っている。（矢間伸次 2006/01/13）

3.一つの決断が時代を変えるとき

歴史街道 10月号（PHP出版）は、高杉晋作の特集が組まれている。晋作ファンは、必読ものである。サブタイトルは、「一つの決断が時代を変える時」である。晋作を知るには、まず「上海留学」がキーワードである。

「1862年の5月から7月まで約2ヶ月間、晋作は上海に滞在した。戦いに敗れ米欧の植民地になりつつある清国の実情や荒れ狂う太平天国の乱などを目のあたりして大きな衝撃を受けた」 月刊松下村塾より引用。

徳川幕府体制のままでは、「日本もいずれ清国と同じ状況になってしまう、いまこそ長州藩は国のために立ち上がらねばならない」という危機感が晋作の行動をさらに過激させた。欧米を追い出せ、から一転して倒幕に傾くのである。

英国は清国と交易していた。しかし英国は清国から、お茶等を買う（イギリス人がお茶を楽しむようになったのは中国の影響である）だけで英国から売りつけるものはない。英国は貿易収支が悪化して「金欠」状態となる。買ってくれる商品（武器を売りたいがっていたらしいが清国は無視）が無いからといって「アヘン」を清国に売りつけるとは余りにも酷い。

清国は内乱も収められず国民は弊害していた。なんと、清国は外国の軍隊を頼って内乱を鎮めようとした。そのシッペ返しとして「上海」が植民地化されたのである。西欧列国の植民地である上海は、清国民にとって悲惨極みない状態であった。「日本を上海のように西欧列国の植民地にはいけない！」これが晋作の思いであった。

幕末のヒーローは、吉田松蔭、坂本竜馬、勝海舟が代表格であろう。晋作は彼らに比べ評価は低いようだ。その理由は、長州藩の柵から「晋作」が抜けきれ

なかったことが指摘されている。幕末での藩は、会社に当てはめてみよう。晋作は長州藩（会社）が、好きで、好きでたまらなかつただけのことである。だからこそ、長州藩（会社）をグローバル化させる為に改革したのである。強い長州藩（会社）がリーダーとして、改革した他藩と共に強い日本をつくるという考えである。

いまどき晋作のような愛社精神を持つ社員がいるであろうか？社会の変化に対応できない会社は、いずれ滅びる。しかし変化はだれもが嫌う。でも、だれかが改善していかねばならない。しかしいまは、会社が滅びるのを、ジッと声を潜めて眺めている状態であろう。恐らくなんとか自分の定年まで会社が生き延びてくれるのを、ひたすら願っているだけではなかろうか。社員を大事にしない会社が悪いのか、その真相は知らないが皆がダンマリを決めこんでいると本当にヤバイ！ことになる。（矢間伸次 2006/09/13）

4・吉田松蔭と特許明細書、あるいは迷彩書？

2008/02/25日の「篠原ブログ」に吉田松蔭先生のことを書かれていた。（タイトル：二人の寅次郎）。そのとおり！！自分の考えを人様へ判りやすく、誤解のないように伝えると言うことは、優しい心を持っていなければ出来ない、ことである。

吉田松蔭は行動する思想家である。一人でも多くの人に自分の思いを賛同してもらう必要があるわけだ。そこで吉田松蔭は「自分の思いが相手に伝わらないのは相手が悪い（理解不足）のではない。自分の伝え方が悪いのである」と、説いている。つまり、自分の思いを伝えるには、相手を思いやる優しい心を持ち合わせていなければ共感は得られない、ということである。

人は、それぞれの考え方がある。人を説得させるには「正面から押して駄目なら後ろから、後ろが駄目なら上から、上が駄目なら下から、下が駄目なら斜

めから押してみる」。このように相手の視線（目線）に合わせる優しさが必要なのである。人様から理解を頂くためには「どうすれば良いか」を真剣に考え悩むことである。

意味不明の特許明細書（説明書）を、意図的に書く人はズルイ奴で卑怯者がする仕業である。では、悪意は無く相手を説得させる説明力が足りない、つまり勉強不足を感じている人はどうすれば良いか。弊社の「テクニカルライティング教室」へ入れば良い。文章力が上がるだけでなく心も優しくなるヨ！（矢間伸次 2008/02/26）

Ⅲ.多くのアクセス数を頂いた「発明くんたより」: 抜粋版

1. いろんな人達の支えがあったからこそ、

さてさて昨日の続き～。日本アイアールが中国事業を始めたのは1995年のことである。中国事業を始めて間もない頃は失敗の繰り返しで苦勞の連続である。失敗すればお金も嵩む。そのような時期から支援してくれたのが、昨日のブログで紹介した知的財産部長である。

“中国特許調査は、今のところ何処に依頼してもロクな結果しかでないことは分かっている。オレは承知しているからオメーのところでもやいなヨ！お前さんは金儲けが上手くないようだ。会社が儲かっているとは思えない。新しいことに挑戦するには金が掛かるだろう。志だけでは喰っていけないヨ。うちの金を使って、うちと一緒に中国のことを勉強すればいい。お前さんならいずれ日本の為役に役立つ仕事をしてくれそう。ただしうちは、厳しい要求はするヨ。しかしお互いのスキルが高まるように努力して、中国のことなら日本アイアールと、言われるように頑張ってもらいたい” という調子であったと記憶している。

「サムライ部長」は池波正太郎の「鬼平犯科長」の大ファンである。もちろん、「世界に通用する特許仕様書をつくろう」という弊社のコンセプトを全面的に支持してくれている。また実践者でもある。特許係争に巻き込まれても臆する事がない。卑屈にならない正々堂々とした態度が、外国人を味方にするのであろう。日頃からお付き合いしていて、その片鱗は見える。このような「サムライ」が知財部門に必要であろう。「サムライ」は刃こぼれしない刀が必要である。知財の「サムライ」は、強くて広い明快な特許文書が必要である。機会があれば「サムライ知的財産部長」のアメリカ特許係争（パテント・トロールからのイチャモン）の奮戦、苦闘記を御披露できればと考えている。（矢間伸次 2006/12/29）

2. 味わいのある日本語と論理的な日本語の使い分け

花粉症に悩まされているから「花粉情報」には敏感である。本日の花粉情報は、「やや多い」であった。「やや」って、「どのくらい多いの」と言われてもハッキリと分らん。でも、なんとなく納得である。ひとによって違うから、ちよいと「ややこしい」。でもこの場合の「やや」は「ややこしい」の「やや」とは違うから日本語は余計にややこしいのである。

「やや硬い」「やや軟らかい」はどの程度の硬さ、軟さであろうか、各自が勝手に想像するしかない。日本語は想像力を豊かにしてくれる。許容力もタップリとある。

ある製品マニュアルに「ネジはやや硬めに締めてください」「レンズの汚れは、やや軽く拭き取ってください」とある。いったいどの位の強さで締めつけるのか、軽く拭き取るとはどの程度なのか「フア-ジィ」ではあるけど、なんとなく納得している。アメリカ人には、この「加減」「許容」「裁量」が理解できるのかな？

文章を読むときも書くときも、絶えずこのようなことを意識するとゲーム遊びをしているノリで結構楽しめる。叙情的な日本語と論理的な日本語を相手によって使い分ける「脳みそ構造」が必要のようだ。自分が書いた日本語が果たして翻訳できるのかな？（矢間伸次 2007/04/07）

3. 日本アイアールがテレビで紹介されました

2007年12月18日、日本アイアールがテレビ東京12CH（ワールド、ビジネス、サテライトPM11:00～12:00）で紹介されました。ご覧になった友

人からメールをいただきました。

「WBS 拝見させていただきました。明細書の品質や明細書の翻訳の品質が多少なりともテレビ番組で取り上げられたのは、初めてではないでしょうか？正直驚きました。多くの一般の人が見るテレビ番組なので、もっと一般的な模倣品の話ばかりだろうと、想像していました。矢間さんが取材をうけたということで、そんなことはないと思いつつも、勝手にそう思っていました。なので、番組を見て驚きました。」

放映内容は、大きく分けて3つの構成で纏められていました。①. 日本企業（有名企業）さんの模倣品の実態を披露して、知財担当者のコメント。結論は「モグラ叩き」で基本的な解決策はない。②. 零細中小企業の「カツラ屋」さんへの取材。200円の商品が中国では40円で売られ、会社の売上が25パーセントも減った。中国、韓国、日本国へ800万円も掛けて特許出願して権利を取った（つもり）が役に立たない。結論は、お金を掛けて特許なんて出願しないほうが良い。

③. ここで日本アイアールの登場である。権利が行使出来る「戦える強い特許明細書」を作成しないと裁判にもならない。ということで、「戦える強い特許明細書」をつくる現場取材した。弊社の中国弁理士がクライアントを訪問して発明者から聞き取りをした。現物の機械装置を動かしながらの聞き取りである。

最後のゞ、統括は、外人のコメンテーター（経済の専門家？）で、ちょっと本質の問題から逸れたかな。外人だから、せめて“意味不明の日本語から中国語に変換することはできないと思う。だから権利の行使ができないのでは・・・”と結んでくれれば「ベスト」。でも、放映のストーリー展開は、さすがはプロ、上手に纏められていた。（矢間伸次 2008/01/10）

4. 今月のメルマガは、作家浅田次郎の文章で締めくくり

浅田次郎の著作、「勇気凛々の色」の中に文章書きの文章作法という下りがある。：文章作法と言え、かの「大谷崎」が「文章読本」の中で口酸っぱくして語る「分るように書く」とであろう。文章とは、言葉による意思伝達の手段なのだから、なにを言わんとしているのか分らないのでは身も蓋もない。即ち、良い文章は分り易い。古今東西、名文といわれるものに分りづらい文章など、ひとつもないのである。

さりとして、改めて文章を書こうとすれば、誰しもふと銜いが頭をもたげ、ともすると意思伝達どころか過大な自己表現になってしまう。あるいは何とか分らせようと思うあまり修飾過剰となり、かえって分らぬ文章になる。世に悪文と言われるものは大体この二通りである。ある程度の教養を身につけた人ならば、簡単なことを難しく書くのはいともたやすい。難しいことを以下に簡単に書くかということこそ難しいのである。思うに文章作法と言うものは、これに尽きる。：（そのまま引用）

浅田次郎さんに「日本特許明細書」を一度、読ませてみたいものである。多分、腰を抜かして驚くであろう。更に、この意味不明の「日本特許明細書」が翻訳されて世界にばら蒔かれている事実を知れば、日本の将来に絶望する（？）一見、英語風に翻訳された「ジャパニッシュ」は、100年後には世界遺産に登録されるであろう。（笑）

技術の説明文章は、小説と違い「文明」の言葉を使うだけでよい。水は高い所から低い場所へ流れるのは世界共通である。技術の説明は事実を分りやすく記述すれば良いだけで気どる必要も自分の知識を自慢する必要もない。文化の言葉と違い文明の言葉は意思伝達するには使いやすい言葉であるはずだが・・・ちなみに小生は浅田次郎の大ファンで新書が出れば「一気読み」である。（矢間伸次 2008/06/18）

5.曖昧が諸悪の根源である

2008年の「ノーベル物理学賞」を受ける益川敏秀教授（京都産業大学）と小林誠教授（高エネルギー加速器研究機構）が12月8日の午前に受賞記念講演に臨んだ。小林教授はゆっくりとした英語で説明した。益川教授は「I am sorry, I can not speak English」と英語で切りだすと、ハッキリとした日本語で自らの生い立ちから話し出した。（今朝の朝刊）

益川教授の勇気は感動した。本人は「英語は苦手」謙遜をしている。しかし、恐らく曖昧な英語で説明するより正確な日本語からの通訳を望んだと思われる。ここで特許の世界へ話しを飛ばすことにする。

12月4日（木）、弊社主催のセミナーを開催した。講師は「知財工学」を研究している玉井氏にお願いした。玉井氏いわく「諸悪の根源は、全て曖昧（フアジ）にある！曖昧は誤解を招きトラブルの根源となる！曖昧を明確にするのが知財工学である」と。

日本企業は外国から特許係争に巻き込まれる機会が増えてきた。しかし多くの日本企業は敗訴（和解）の連続で大金を巻上げられている。その元凶は曖昧な説明にある。外国企業（特に米国）との係争処理は英語で対処せざるを得ない。曖昧な英語翻訳と専門外の通訳では相手を説き伏せられる（説得させる）わけが無い。

外国企業との特許係争に「益川教授流」を取り入れたらどうだろう。下手な英語で対処して勝てる理由が見当たらない。相手が日本企業を訴えて来たのだから「日本語」でやればよい。自分は「日本語」以外は通じない、だから日本語で説明する！と開き直る勇気と気迫が必要だ。（2008/12/10 矢間伸次）

6・特許請求項の「単項制」と「多項制」の違いがわかりますか

2010年4月13日の「天声人語」から

戯曲に小説に評論に、幅広い仕事を残して井上（ひさし）さんが亡くなった。言葉のもつ力をとことん信じた人だった。脚本を書くうち、日本語を問題にすることになったと話していた。「日本語は主語を隠し、責任を曖昧するのに都合が良い。その曖昧に紛れて多くの人が戦争責任から遁走した」と。日本語を様々な角度から見つめてやまない人だった。「むずかしいことをやさしく」と言い、さら「やさしいことをふかく」と、踏み込む。

故人、井上ひさしさんが日本の特許明細書を見たら（まず読めないと思う、ざっと眺める程度でも）恐らく卒倒したに違いない。井上ひさしさんは平易な一語一語に最大の力を宿らせるための命を削る戦いをしていたとも言われている。

命を削るほど真剣に特許明細書を書く人は、いないと思う。日本の特許明細書が、なぜ世界で通用しないのか、その原因が判ってきた。「特許はお上から授かるもの」、これが日本の特許システムである。「特許は自らの力で取りに行くもの」、これが世界の特許システムである。

下記の話は、古くからお付き合い頂いている弁理士さんから聴き取った。

「日本の特許明細書は、発明の中心限定主義である。特許明細書とクレームに書かれていない事項はそのつど、解釈すれば良いという極めて日本的な文書となっている。欧米の特許明細書は、周辺限定の囲い込みである。即ち特許明細書に書かれていない事項はすべてアウトとなる。

欧米型の特許明細書は、発明技術をビジネス面で活用して金儲けをするための事業計画書の性格を持つ。また事業を進めるうえでの発明技術の使用範囲を決

めた契約書にもなっている」と、さらに

「とてもじゃないが自分には欧米型の特許明細書は書けない。欧米型の特許明細書を書ける日本弁理士は極めて少ないと言わざるを得ない。逆に欧米型の特許明細書を書く弁理士は異端とされ、排除される可能性すらある」。と、さらに話は続く

“日本の特許制度は、「単項制」を採用してきた歴史がある。世界の流れとして、日本も「多項制」を採用したが、「単項性」の名残りがいまだに尾を引いていると思う。「単項制」に慣れた日本弁理士の多くは、欧米人の思考から生まれた「多項制」の本質を理解できていない気がする。

だから矢間さんが言うように日本の特許明細書は世界の中で通用しない。つまり世界の人から理解が得られず、戦うにも戦えない。まさに IP 戦争とは言語の戦いである。文章表現の酷さも有るが、それ以前の問題として文書（仕様書）の構成、論理展開（ストーリーの流れ）が違う”。（2010/04/15 矢間伸次）

7.困った！「放射能汚染土」の処分

2011年、最後の「発明くん便り」です。2011年は地震、津波、放射能の3点セットで「くら〜い」1年となりました。「発明くん便りの」締めくくりは放射能汚染とします。

市道と我家の境界に側溝がある。この側溝は市道の雨水を下水道に流すためである。この側溝は、なぜか上蓋が無い。枯葉、泥、石ころ等が雨水と共に側溝へ落ちる。

この側溝へゴミまで投げ捨てる輩がいるのには呆れるが、雨水だけを下水道へ流す対策として側溝の途中で「ステンレス金網」を自分達で施している。勿論、この網に引っ掛かったゴミの取り出し作業は自分達で行っている。

10月下旬、この側溝の放射線量を計測したら、なんと！5マイクロシーベルトを記録した。驚いて早速、市役所へ報告した。速やかな行動とは言い難いが市役所の職員さん一応、測定しに来てくれた。しかし測定の結果「確かに高いですね」で終わり。処理はどうしてくれるの？と聞いたが「政府からの指示を待っています」で終わり。そのまま放置された状態で、その後の連絡は無い。

側溝の「放射能汚染土」は、どうも我家の所有物らしい。詰まり放射線物質は天から授かった財産あるから大事に保管をしてください。これが政府の方針のようだ。嫌であれば所有者が処理をする必要があるようだ。このまま、放置し続けるわけにはいかない。仕方が無い、完全武装をして11月中旬、側溝の「放射能汚染土」を厚いポリ袋へ入れて、更にポリバケツ（大きいサイズ）に押し込んだ。

とりあえず、そのポリバケツ2杯を車庫の隅へ隔離しているが、5マイクロシーベルトは減るわけではない。隣家のご主人がこの「放射能汚染土」の引き取りを「しつこく、しつこく」市役所と掛け合ってくれた。どうにか12月17日（土）に引き取ってくれそうである。

但し引き取るのは「放射能汚染土」だけで他のゴミ（衣類等）は引き取れない、とのこと。「放射能汚染土」以外のゴミ処理は担当部署が違うらしい。「側溝上蓋」の陳情も担当部署が違うらしい。面倒なので自己負担で上蓋（約40枚）をすることにした。東電へ請求できないかな・因みに自分が住んでいる街は「ホットスポット」で有名な柏市である。誠に不名誉なことである。もう一つ有名なのはJリーグで優勝した柏レイソルであるが、こちらは誠に名誉なことである。（2011年12月16日・矢間伸次）。

8.探偵小説はロジカル

夏休みに探偵小説の草分けである「江戸川乱歩」を紹介した小冊子を手にいれた。いままで知らないことが随分とあり、興味深く読ませてもらった。「江戸川乱歩」のペンネームは、世界初と言われている推理小説「モルグ街の殺人」を発表した「エドガー・アラン・ポー（米国）」から拝借したそうだ。

いま、テレビで人気の「名探偵コナン」は「シャーロック・ホームズ」の生みの親である「コナン・ドイル（英国）」から拝借して名付けられたことを初めて知った。

江戸川乱歩が探偵小説を書き始めた頃の日本小説は「情感」を描くことが小説家の腕の見せどころで、謎解きやトリックの面白さを追及した推理小説は皆無であったらしい。推理小説を読みたい人は原文（英語）でしか読むことが出来なかったそうだ。

推理小説は科学的にトリックを組み込んだ読み物であるから、日本人で書ける人は居なかったという。勿論、読者も少なかった筈だ。推理小説は、欧米人の論理思考には向いているが「情感」を訴える日本人には受け入れ難い読み物であったらしい。しかし名探偵「明智小五郎」や「怪人 20 面相」の出現で謎解きやトリックの面白さが日本人にも受け入れられるようになった、という内容であった。

もう一冊、「梅棹忠夫 語る(日経プレミアシリーズ)」を再度読み返した。その中で「文章は誰が読んでも分るように書く」という章がある。

その章の中に次の語りがある。「私の文章は文学とか文章道とかいったこととは関係が無い話であって、要するに一種の設計図みたいなものです。図面には間違いの無いように、きちんと線が引いてある。それは規則とおりに書いてあ

るから、そうなるんだというつもりで書いているんです」。(人生読本 1978 年 河出書房新社)

「江戸川乱歩」のパズルを嵌め込むような面白い探偵小説と「梅棹忠夫」が述べている文章のあり方には共通点が見出せる。それは日本人が苦手とする”ありのままに書く、厳密に書く、整合性が取れるように書く”という部分ではなかろうか。つまり、物事を人に伝える文章は「論理的に組上げられ、最後に全てが繋がっていく整合性と、きちんと線引きされている明確性」がなければ読み手側の理解、あるいは面白さが伝わらないということである。

日本の「ウヤムヤ」はあちらこちらにある。「日本特許明細書」も、その一つであろう。特許明細書は技術の説明書である。技術は文明そのものである。技術の説明は「情感」で訴えるものではない。ありのまま、見たまま、事象のまま、「文明日本語」で分かりやすく書けば良い。文章を美的に飾る必要ない。

(2012/08/28 矢間伸次)

9.日本語の難しさを改めて知りました。

「都合の良い話」しか聞こえない不思議な我が耳は、名医の施しで「都合の悪い話」でも聞こえるようになった。てなことで本年はブログを再開したいと思う。新年早々、脱線気味の投稿で申し訳ないが本年もどうぞよろしく願います。

カミさんの友人が、おもしろい発明をしたので聞いて欲しい、ということで茶飲み会をした。おばちゃん同士の話は、あらぬところへ「アッチ、コッチ」と唐突的に飛ぶ。しかしチャンと伝わるからすごい。

「亡くなった主人の母が・・・」が耳に入った。私は主人が亡くなったのかと取った。お悔やみの言葉を捜しているうちに、亡くなったのはどうも主人の母親であることが判明した。カミさんは日頃からお付き合いをしているので主人の母親が亡くなったことを知っているわけだ。私はその様な背景を持ち合わせていない。

同じ仲間（村社会）であれば理解できるのであろうが、村人でない私には背景が分からない。私が翻訳したら「亡くなったのは主人です」と訳す。カミさんは「亡くなったのは主人の母親です」と、正しく訳せる。

このように日本語は曖昧で係り受けが不明確である。聞く人、読む人の判断によって意味が異なることが生じる。係り受けの分かり難い文章が「知財文書」にも使われているとすれば、翻訳が難しく誤訳をおこすのは当然である。

（発明くん/2016/1/12）

◆.余計なことですが、これだけは言っておきたい

1.特許網の意味を理解しているのかな～？

特許出願は量から質へと転換せねばならない、と言われているが本質が分かっている人が、果たして居るのか？「下手な鉄砲、数打ってもあたらぬ？」「下手な鉄砲、数打てばそのうち当たる？」

日本企業の特許出願戦略は、いずれに当たるのか定かではないが、どちらにしても酷いものである。「特許はたくさん出してさえいれば、そのうちグチャグチャになって「特許網」が自然と構築される」特許法という自然の法則とはこのことだったのか、俺は知らなかった！「侵害されたくなければ、どんどん出願する必要がある。特許とは金が掛かるものだ！文句あるか！」つまり、何も考えずに特許出願をしても件数さえ出してさえいれば、いつのまにか「特許網」ができて、そのうち一つぐらいは役立つものがあるかも・・・(以下省略)。

2005/12/27

2.知的財産部の不要論が出て仕方がない？

それにしても世の中の変化は早くて、振れの大きさに驚いている。しかし人の意識だけは変われずに、会社も組織も混乱をきたしている。企業が不祥事を起こす因が、このあたりにありそうだ。

「変わるの嫌だ！」「これまで通りにやりたいのだ！」「自分の守備範囲以外のことはやらないぞ！」「このまま定年までやって逃げ切りりたいのだ！」と、いくら頑張ったところで、もう無理であろう。

自分に直接、被害が及ばない限り、つまり崖プッチに追い詰められ火の粉を浴びない限り、変わろうとしなかった既得権獲得者もいよいよ後がない。何処の会社も今以上に厳しくなる事、保証つきである。何でも有りの時代、これから何が起こるか分かん。しかしその覚悟はないようだ。

親父たちは逃げ切りだけを考え、働き盛りはノイローゼ気味？若手は何時会社を辞めようか、此れでは会社の求心力が失せるのは当然か！今こそ、会社や組織の、常識を打ち破り、視点を変え、柔軟発想で新しい仕事を生み出す元気があるのだが・・・・・・・・。

特に知的財産が重要視されることで知的財産部署の役割は大きくなるのは間違いない。しかし、変わらない「知的財産部」ならば、不要論がでてでも仕方あるまい(以下省略)。(2006/02/21 矢間伸次)

3. やってしまったことは仕方ない、これからが大事

我々日本人が何回となく読んでも分からない「日本特許明細書」が外国人に分かるわけが無い。そのまま「直訳翻訳」されているとなれば尚更のことである。意味不明、曖昧な文章は、お互いの「落としどころ」を見出すのに都合が良いのであろう。ただし日本人同士の係争という条件がつく。しかし外国人には「落としどころ」「腹芸」「談合」は理解し難いはずである。

“好む、好まない”に関わらず日本は、世界を相手にして生きていかねば成らない。これがグローバル化という社会の変化である。社会の変化に合わなくなった仕組みは勇気をもって変えて行かねばいけない。其の時代、時代に合った方法で最善を尽くしてきた自負があるならば「これまでは、これまでのこと」と、この際、割り切って次の変化に挑む勇気がある(以下省略)。(2006/04/05 矢間伸次)。

4.分かる人は分かる、分からない人は分からない、

名古屋からの来客である。弊社の中国関連カタログを見て、「是非、お願いしたい！」ということである。弊社カタログのどこが気にいったのか、その確認をしたら「紙クズをこれ以上作るな！」というフレーズが気に入ったとのことである。

カタログに記した文面は、①出願件数だけをノルマとして、無責任、丸投げしている問題意識をもたない企業からの中国特許出願依頼はお断りします。②意味不明の翻訳不可能な日本語は、いちいち確認を取らせていただきます。この重要作業を面倒がる企業の中国特許出願はお断りします。という恐ろしく強気の内容であった。ところが名古屋から訪ねてくれたお客さん曰く、「いちいちご尤も共感した、弊社からの仕事は断らないで」ということになった。

訪問いただいた企業は機械製造専門メーカーで、特許出願件数は少ない。お客様曰く「特許出願する発明は会社の将来を左右する重要な技術である。だから紙クズでは困るのだ。」さらに「弊社の技術者が日夜、其れこそ我が身を削りながら死に物狂いで開発した技術を、たった一枚の紙切れで（最後の詰めで）全てが駄目にするには許されない。勿論、経営陣も命がけである」と。

日本アイアールが提案する改善策の価値が「分かるひとは分かる」「分からない人は分からない」のである。仕事は楽しくやりたいから「分かる人」とお付き合いしていくことにする。(2007/07/10)

5. 耳の痛い話 (2/2)

日本アイアールさんは、いったい何を喰って生きているのか(?)の続き。
“訳の分らない「オタク商品」はクライアントには受け入れられる筈がない。営業する営業マンの苦労は察してあまる。しかも会社は貧乏そうである。儲かる商品を営業マンに与えない会社は失格である”、ということらしい。このご

指摘、いちいちご尤もで実に耳が痛む。最近は何が更に遠くなったから都合はいいけど。

しかし失格といわれても、会社を畳むわけにはいかない。サラリーマンは会社を辞めたら退職金とか金はたくさん残るけど、零細企業は借金しか残らないのである。幾ら辞めたくても辞められないのである。だから面白おかしくやるしかない。これが、せめての言い訳である。“営業さん勘弁してください、すいませんです、そのうちアイアール商品は必ず認められるから”と、これを言いつづけて既に10数年は経ったかな。このままだと本当の「ホラ吹き」「大嘘つき」に成りかねない。(2008/04/09 矢間伸次)

6. 新型万能細胞(iPS細胞)の特許出願

4月11日～12日の両日に渡って新聞報道されていたので皆さんも既にこのニュースをご存知であろう。私が読んでいる幾つかの新聞の全てに載っていたので大きなニュースであることは間違いない。

記事の内容は「ヒトiPS細胞」に関するものである。記事タイトルを、改めて幾つか書き写してみる。「バイエル薬品、先に成功？特許取得で活用に影響も」「京都大学、第一出願を強調、特定企業の独占を懸念」「バイエル、特許取得なら日本での活用に支障も」「人iPS細胞、特許の行方混迷、医療応用にも影響」「京都大学、基本特許で優位性を主張」「万能細胞など関連特許、日本勢は内弁慶」「米欧への出願シェア5パーセント止まり」などなど。

新聞記事の内容を読む限り、特許を出願しているか否かの表面的現象のみの報道に終始している。しかし問題の本質は世界の当業者が理解できる「発明の説明」がなされ、権利が正しく主張されているか否かである。翻訳できない日本語文章を翻訳した翻訳者は、本当に正しく翻訳ができたであろうか？世界の研究

者へ明確に基本特許と成る発明を伝えていなければ全てが「パ～」になることが一言もかかれていないのが残念である(以下省略)。(矢間伸次 2008/04/16)

7.半導体、液晶関連の日本特許は、本当に役に立ったのか

ところで半導体、液晶関連の日本特許は、本当に役に立ったのであろうか。数え切れないほど、膨大な特許を持っていながら、韓国や台湾のアジア企業に、なぜ追い越されたのか、いまだに謎である。威力のある弾(特許)が元々無かったのか、威力のある弾(特許)を探し出せなかったのか、あるいは何を書いているのか、意味不明な特許文章が障害となったのか、当事者の話を是非、聞きたいものである。”特許有効期限が切れた、ライセンス契約が切れて、更新契約ができなかった”、それだけの問題では無さそうである。

個々の発明を絶対評価する共に、技術関連状況、技術発展状況、実施技術状況といった技術単位、及び製品単位での相対評価がされていなかった、のではなかろうか。例えば、基本となる特許との紐つけ、紐の色分けと言った技術相関を絶えず意識することなく、発明者から上がってきた発明届書を、そのまま右から左へ出願していたとしか思えない。つまり、特許出願件数だけは、「やたら」と多いが、それぞれの特許はバラバラに管理され、次から次へとバラバラに寿命が尽きていく、という場当たりの「知財管理」であったと思う(中略)。

日本人は、なんでも「場当たりの」という、特性を持つらしい。とりあえず、いま問題が起きていないから、と言って先送りをしたがる。ところがイザ、問題が生じた時は、以前とは廻りの事情が大きく変わっている。だから、解決方法が複雑で難しくなる。特許の世界も同じである。いま、問題がないから、何も考えないでは、災いは後輩達に押し付けられる。問題が起きた時に最善を尽くしても、最善の尽くしようが無くなる。日本人は「戦略」という言葉が好きな割には、チツとも「戦略的」ではない。(2012/06/22)

◆ PATOLISの民事再生法

1.日本初の特許情報検索システム「PATOLIS」

7月17日、「パトリス」は東京地方裁判所に民事再生法の適用を申請した。なお、法的整理期間中も特許情報オンライン検索システムは「通常通り稼動しており」契約者に支障が及ぶことはない。新システムの開発に多額な費用を必要としたことが今回の措置となった。営業利益は確保している。

このニュースは関係者に大きな衝撃を与えた筈だ。私もその一人である。私が特許業界でお世話になったのが1972年である。財団法人日本特許情報センターは1971年の設立で、我々は「ジャパテック (JAPATIC)」と呼んでいた。特に「JAPATIC公開抄録」は、多くの大企業が購入していたと記憶している。

この「JAPATIC公開抄録」は特許庁が発行する公開特許公報（7部門14区分）から抄録を作成して発行していたのだが、民間の「情報提供サービス会社」にとっては極めて手強い商品であった。発行形態は、A4版一枚に3件、一冊で100件の公開特許情報が収録され収録内容は抄録と図面である。価格は2600円/冊で、結構な値段である。（2009/09/11）

2.「JAPATIC」は、特許業界の王者.

当時、私は株式会社リコー情報機器機材部でマイクロ機材の販売をしていた。マイクロ機材といっても資料を撮影する側の撮影機材ではなく、マイクロ化された資料を読取る側の「マイクロフィルムリーダー」である。この「マイクロフィルムリーダー」を拡販するために、特許庁が発行する特許公報をマイクロフィルムにして商品化したのである。要するにハード(機器)とソフト(マイクロフィルム)のセット販売である。

この特許公報の「マイクロフィルム化商品」は、特許公報をそのまま（発行順）撮影したものではない。特許庁審査官が付与する日本特許技術分類（JPC：1～136類）をJPC分類順に編集して撮影をした商品である。勿論、マイクロフィルムへ撮影された特許公報の「所在（番地）」を知る「分類索引」が必要となる。「分類索引」だけでなく「出願人別索引」も必要である。

特許公報には主分類と幾つかの副分類が付与されていたので手作業での編集は不可能である。そこでコンピューターが利用された。日本で初めて特許情報の書誌事項がコンピューターへ蓄積されたのである。（当時は漢字でなくカタカナ）この商品は、自社が必要とする技術分類だけ購入すれば良いというメリットがあった。例えば薬品メーカーであれば16類と30類を購入。

昭和46年に特許公開制度が発足し「公開特許公報」が特許庁から発行されるようになった。リコー情報機器機材部は、公開特許情報の抄録サービスを製作販売することになった。まずは化学分野の抄録サービスから開始した。日本分類（JPC）の付与は、いい加減（？）とすることでリコー独自の技術分類（TPI分類）を付与して、8分野に分けて「TPI抄録」と商品名を付けて販売することになった。私は、この「TPI抄録」の営業を担当することになった。

この商品の競合相手が「JAPATIC抄録」である。他にも日本発明資料が切り貼り方式の「公開特許ダイジェスト版」を超激安で販売していた。化学分野だけでは限界があり、その後、全産業分野に収録範囲を広げた。この商品が「NEW-SDI サービス」である。

1979年、リコー情報機器機材部は「特許情報サービス事業」を財団法人JAPIO（日本特許情報機構）へ移管することになった。私は、日本アイアールで、「JAPIO 特約販売店」として「公開特許抄録、NEW-SDI」の販売することになった。（2009/09/16）

3.PATOLIS から見える特許業界の歴史

特許業界の先駆者「JAPATIC」の歴史を整理してみる（JAPIO ホームページ等から引用、特許業界の創成期を知らない方にお勧め）。

1. 1964 年、特許庁内の出願事務の機械化を開始する。
2. 1970 年、特許公開制度を含む特許法の一部改正が国会において可決成立する。膨大な特許情報をコンピューターの利用により迅速に処理をし、提供する為の機関を設立する必要性が全会一致で決議される。
3. 1971 年、民間の財政協力で、財団法人日本特許情報センターが設立される。特許・実用新案の書誌事項及び特許・実用新案の技術内容に関する情報提供。社団法人発明協会との協力の下に特許情報を纏めた和文抄録等を発行。国際特許情報センター（INPADOC）との特許データ交換事業も実施。
4. 1978 年、日本最初の特許情報オンライン検索システム「PATOLIS」を開発しサービスを開始する。特許庁の特許情報の提供をうけてスタートする。
5. 1984 年、特許庁のペーパーレス計画が開始される。
6. 1985 年、JAPIO が設立される。特許情報事業を一元化すべきとの「通産省・特許庁」の指導による。日本特許情報センターと発明協会の特許情報サービス部門を統合。
7. 1990 年、特許庁は特許・実用新案の電子出願（オンライン出願）受付を開始。
8. 1993 年、特許庁は 1 月より CD-ROM 公報の発行を開始。
9. 1996 年、CD-ROM 公報を利用した民間事業者によるインターネット検索サービスが登場。NRI サイバー・パテント・日本発明資料・発明通信社・日本パテントサービス・中央光学等は存続。グリーンネット・其の他大手情報会社も進出をしたが多くが撤退。
10. 1997 年、特許庁は PAJ（日本特許の英文抄録）のインターネットサービス

を試行。

11. 1998年、特許庁はホームページ上で検索サービスを開始。公開特許公報のフロントページ&PAJを発行。CD-ROM公報をマージナルコストで提供。

12. 1999年、特許庁は特許電子図書館（IPDL）を開設する。特許庁保有のデータを整理標準化してマージナルコストで提供。

13. 2001年、株式会社パトリスがスタートする。PATOLISを中心にJAPIOの業務を民営化。

◆おまけ：復興大臣辞任を巡り「白河以北一山百文思想」とは

1.(935)白河以北二東三文：中央と地方の関係

明治初年（1868年）、戊辰戦争の終幕時に、長州の誰かが”白河以北二東三文”とうそぶいた、という。司馬遼太郎さんの本のどこかで読んでのうろ覚えの受け売りだから正確かどうかは保証の限りではないが、気分はわかる。

事実、東京に置かれた明治政府にとって、東北の地は多分ほとんど植民地的な僻地であっただろう。しかも、秋田の佐竹藩を除き、ほとんどの藩が「官軍」に抗した（その多くはどうしようとうろウロしている間に「奥羽同盟」なんぞに組み込まれて気がつけば賊軍になっていたぐらいのところだったと思われるが）ために、薩長土肥を中核にする明治政府からはキツイ「いじめ」にあった。

廃藩置県においても、官軍についた地域とは異なり、中心の城下町の名が県の名前とはならなかった。会津若松県とはならず、寒村の福島の名が県名とされ、仙台県とはならず宮城県、盛岡県ではなく岩手県、弘前県とはならず青森県という具合である。一種の「いじめ」、この列島に残る陰湿な風土病である「いじめ」の一つの現れである。

そのことは置いておいて、今回の東北大地震・大津波およびそれに伴う福島原発事故は、このジャポニカ列島がその明治維新以来抱えてきた色々な構造的な課題を日の下にさらけ出してくれた。これまで様々な覆いに隠されて見え難くされていたものが、あたかも津波で遮蔽物が全て押し流されて、瓦礫の小平野のあちこちにポツンポツンと問題物が裸で立っているかの趣がある。

その中の一つに中央と地方という構造的問題がある。

私は寡聞にして、あるいは怠慢ゆえに福島原発の設置の経緯を知らない。ただし、想像はつく。多くの反対があった（はず）の中で原発設立を地元が受け入れることになったのは、中央の政府が差し出す二つの「エサ」に惹かれたためであろう。”働く場が増えますよ”というキャッチと”補助金をたくさんもらえますよ”という二つに心が揺れ動かされたのではないか。

明治政府以来、この近代全史を通して、この列島では中央が地方を支配する構図が保持されてきた。全ては中央が定め地方はその命令に従うだけという構図である。この仕組みを可能にしたのは、そして今も磐石の構えで可能にしているのは、ひとえに卓抜したその集金システムにある。

つまり、この列島の住民が差し出す税金が全て中央に集るようになっている仕組みのおかげで中央の威信が保たれていることになる。この構図は、歴史を眺めれば、何も明治になって初めてではなく、奈良・平安の昔のシステムそのものの焼き直しであったことが理解される。全国60余国から集めた租税の下で京都では「花よ蝶よ」と優雅な毎日を送ることができた。それと同じことを列島の近代史は再生して来ているわけだ。

人は生活のため、ビジネスのため、金があるところに群がる。頭をペコペコ下げ、考え付くあらゆるオベンチャラを述べて自分達のところにその豊かなお金の一部を回してもらおうとする。

一方、中央からすれば、その仕組みを長続きさせるには、中央と地方の差を常に際立たせておくことが重要であると理解している。地方が豊かになり実力を養われるとシステムにはほころびが出始めるのでそれを避けようとする。当然のところであろう。目に見えるその差はたとえば東京の一極集中に現れている。東京に憧れを持たせ続けるには、地方は「鄙（ひな）」のままで停滞してくれていなければならない。

従って、お金だけでなく、いや、そのお金を元にして科学、技術から芸能・芸術に至るまで何もかも東京が抜きん出た存在であり続けるようにする。教育・学問の場においても東京大学と地方の公立大学の差は誰の眼にも明かなままにしておく。このようにして、税金という莫大なお金を力にして絶対的権威を維持して来ているわけだ。

その意味で、白河以北の東北の地は中央から見れば今でも辺境の地であり、その地は貧しいままに捨て置かれている。さらに、学術の場の先生方や中央に集めるお金のおこぼれ頂戴で中央政権を取り巻いている幫間達の弁の総動員でもって、地方の住民が不満を持たないようにあらゆる仕掛けが講じられて来ている。明治維新以来150年近くこの一大キャンペーンが続いているわけだから、中央におすがりする構図が当り前のものとして定着している。集めたお金を「地方交付金」とかの名目で、貧乏人にお情けでくれてやるデカイ態度に怒る気力も地方は失ってしまっている。自分達が拠出したお金なのだから恐れ入って頂戴しなければならないことはどこにもないのだが、日銭欲しさに文句も出ない。

福島原発は、このような中央集中システムの中でわなにかけられて出来上がったものである。中央の見事な策略の下に、自分達の手だけではこの貧しさを逃れることはできないというあきらめの下に、差し出されたわずかばかりの給付金につられて迎え入れてしまった。そして、今、この惨状である。

この原発事故でもう一度自分達の地方とは何かを考え直すだけでなく、これからの世界を予測すれば、中央におすがりしてその言いなりになっていては生存が危ういと考えるべき時であることは同時に示されている。化石燃料エネルギーに依存して、またそのエネルギーを基にして展開してきた中央指導のハコモノ・ハイテクに依存しては先が危ういと考えるべきいい機会が目の前にある。

このエネルギーの入手が困難になっていけば、真っ先にへたるのがこれまで輝くばかりであった東京という中央になる。同時に、現行の集金システムを廃して地方地方にまずお金（税金）が集るようにすれば、一日で東京は崩壊する。地域的に見れば食いの自給自足がほぼゼロパーセントというこの東京は生存という面でもっとももろい場所である。

花よ蝶よの京都に頭に来て鎌倉に幕府を開いて以来明治維新まで、700年近く、この列島は地方の時代であったことを思い出せば今の中央—地方の構図を崩すことはそれほど難しいことではない事が理解されるであろう。例えば、江戸時代の学問の水準は地方地方で江戸をしのぐところがあるところもあつた。江戸の旗本が食うに困っているとき、悠々と生きている地方もたくさんあつた。この列島は地方連合の土地であるという姿こそ本来的である、ということが出来る。現在の構図は「白河以北二束三文」と嘯いて（うそぶいて）人為的に造られたものであり、たかだか150年弱の歴史しかない。永久に続くわけもない。今日明日を生きていくために中央におすがりする姿勢を捨てて、あらゆる知恵と気力を総動員して、自分達のことは自分達で経営するという気概をもう一度持てば、昔の地方の気概を再生すれば、これからの時代に生き延びるやり方が見えてくるだろう。

そうすれば、何十年か後に、”利根川（あるいは荒川？）以南は歴史遺物”と東北の地の住人がうそぶく日が来るのではないだろうか。

（11. 4. 20. 篠原泰正）

2.孫子の兵法から「知財戦略」を学ぶ

孫子の兵法が読まれる理由は、人間が生きていくに避けられない戦いの基本原則を説き、いかなる時代であっても応用できるという面白さがあるからだと思う。

兵法や戦略は戦いのノウハウである。基本的には理詰めであり論理的になっている。論理的である条件の一つに前提条件が同じであれば推論の結果、答えは同じとなる。そこで孫子の兵法から基本原則を抜き出して応用すれば「知財戦略」の考え方が見えてくるのではなかろうかと考えた。

「知財戦略」は会社の事業形態や競合他社（経済力・販売力）の状況、あるいは技術領域などによって違うのは当然である。「知財戦略」は、これらの違ったものから共通の性質を抜き出して方向性（答え）を導き出す性質のものである。

1. 最上の「知財戦略」は戦わずして勝つことである
2. 自分を知り相手を知る、即ち自分と相手の比較である
3. 情報を制する者は戦いを制す、即ち勝つめの準備をする
4. 強い企業と弱い企業の「知財戦略」の立て方など（2014/08/28 矢間伸次）

★孫子の兵法から学ぶ「知財戦略」のWEB版教材に興味ある方は、[こちらから](http://www.ipma-japan.org)

<http://www.ipma-japan.org>